

## 知ると楽しい 楽しいからもっと知りたい！教養の作り方①

「人との出会い(岸本裕史)」

学力研常任委員 深沢 英雄

### 一、伝えることができて初めて教養

教養人を辞書的に言うと、「人間がその素質を精神的・全人的に開化・発展させるために学び養われる学問や芸術などを持つ人」です。

単なる知識を持つている人を教養のある人とは言いません。ジャーナリストの池上彰さんは『たくさん本を読んで、知識が豊富になればそれで「教養がついた」ことになるかという、ちよつと違うような気がします。自分の得た知識を他人にちゃんと伝えることができて初めて「教養」が身についた、と言えるのだと思うのです。』  
と言っています。自分の得た知識を他人にちゃんと伝えることができるか、それが教養が身に着いてきたという一つのものさしです。知識を深めて追及し、自分の中で咀嚼

し自分のものになってはじめて伝えることができます。師匠と呼べるような経験豊富な人や先達・先輩からこそ、学べることで、自分の耳で聴き、自分の体を通して、教育実践を多く積み、成功や失敗を経験されてきています。その中で全身全霊の感覚をもって、コツを身に付けて、言語化したものを私たちに伝えてくれています。

### 二、教養の種を育てる

師匠の話を聴くことで、「教養の種」をいただいていると思います。学びには「独学で学ぶ」と「師匠から学ぶ」のバランスがとても大切です。どちらに偏っても成長のスピードは上がりません。「師匠から学ぶ」ことで、学びの進むべき方法や近道を見つ

けるヒントをもらうことができます。

「師匠」という言葉が抵抗のある人もいるかもしれませんが。自分の成長を促してくれる人と言ってもいいと思います。

私は、教師になってから、数えきれないぐらい多くの師匠から教えていただきました。それぞれの師匠から刺激をうけました。この連載の人との出会いでは、岸本裕史から学んだことを書いていきます。若い先生方は、岸本裕史を知らない世代、会ったことがない先生も増えてきました。私が岸本先生から伝えてもらった教養を学力研の会員みなさんに伝えたいと思います。

### 三、岸本先生からもらった種

私が岸本先生に初めて出会ったのは、二十三歳の時です。小学校に勤めた年です。神戸の北区区民センターで行われていた研究会で出会いました。研究会の間中、ずっとフランスパンを小脇に抱えて、ちぎりながら食べられていました。「胃の大部分をとったので少し時間がたつと、おなかがへるんだ。だからパンを食べているから気にしないで・・・。」と説明を受けたのを覚えて

います。

最初に聞いて刺激を受けた話が漢字だったと思います。例会の参加者に「ノートに、曜を書いて。」と問われました。筆順と字形をじつと見られました。「曜は小学校二年生で教えるが、画数が多くて間違いやすいし、字形もよく間違いやすいよ。」筆順の書き方を指摘されました。「子どもには、日ヨヨイノ丁三（にちようよ、いのちようさん）と覚えさせるんだ。」そうか。分かりやすーと思いました。

参加者が全員間違ったのが、ヨの部分です。何度書いてもダメ出しされました。「ヨは元は羽だったんだ。鳥の両翼の象形。羽は、下の部分がちよんちよんとなっている部分より、下になっているよね。だからヨの縦線が三本目の横線より少し下に出ない」といけない。」と話をされました。「ヨ」の部分「羽」だということを知りませんでした。『「イノ丁三」この部分はフルトリ、これも鳥です。尾の短い鳥の総称です。小さく尾が短い鳥だから「雀」、木の上にたくさん集まっている様子から「集まる」。道で「鳥」を使って進むか進まないかを決

める「鳥占い」からできた漢字が「進む」。水面から羽ばたこうとする鳥の水しぶきから「濯」と一気に岸本先生は話をしてくれました。

「そうなのか。へー。漢字って繋がっているんだ。おもしろい。もつと知りたい。えっ。これは、どうなんだろう。おかしいな。疑問がある。」と頭の中で思考が広がりました。「習うは、羽根になっているけど、曜はなぜヨなんだろう。そういえば、曜を書くときにヨでなく羽を書いている人を見たな。昔は羽と書いていたのかな。」と。

漢字の曜を教えてもらったことから「厳密に見る。意味を考える。漢字の歴史に興味を持つ。子どもへの指導方法」など世界が広がりました。

教養の種をもらおうと、もつと知りたくありません。本屋に行つて漢字の本を買いあさりしました。その中に、伊東信夫先生の本がありました。伊東先生の漢字の本がおもしろいと話をしていると、川岸先生が同僚に伊東先生と一緒に勉強している先生がいますと教えてくれました。川岸先生に仲介をお願いして学力研で伊東先生に漢字講座をして

いただきました。川岸先生は、そこで学んだ「漢字のお経」をクラスで実践され、色々な学年配当漢字で「漢字のお経」をつくられました。それが、鈴木先生のリズム漢字につながりました。講座に参加していた岡先生は、その講座で白川漢字学に刺激を受けて、実践や学びを続けられて、漢字の本を出版されました。私も白川先生の漢字の捉え方に興味を持ちました。その時に開催されていた白川先生の講演会に出かけました。京都の宝ヶ池近くのホテルで行われていました。その当時からかなりの高齢でしたがとてもエネルギーが豊富な講演でした。漢字に留まらず、中国・日本の文化についての深い知見を得ることができました。

岸本先生は、私たちに伝える時に「私の一番好きな言葉は、すべてを疑えだ。私の実践や言っていることも疑わないといけないよ。」と言われていました。岸本先生は何冊もの漢字の本を読破されて、漢字指導をされています。漢字の成り立ちにも色々な説があります。岸本先生は自分の話を鵜呑みにしてはいけないということを伝えられたのだと思います。